



《ジェネラリスト BOOKS》
身体診察 免許皆伝
目的別フィジカルの取り方 伝授します
平島 修, 志水太郎, 和足孝之 編

●A5 頁248 2017年4月
定価：本体4,200円+税
[ISBN978-4-260-03029-8]医学書院刊

臨床の極意は「自分が何をしようとしているか(≒鑑別診断)」を明確に意識・言語化することにあるといえる。その意味では本書の副題に「目的別」という言葉が含まれることが既に、この本の企画が優れていることを示しているといっていよい。

3人の編集者は、筆者が医学部を卒業した頃に生まれた若い方々であるが、いずれも筆者が病気をしたら主治医になって欲しい臨床医たちである。言い換えれば、臨床現場で何が問題となっており、それ故に何を考え、何を探せば良いのかが明確な医師たちである。自然、彼らは教え上手であり、既に臨床教育の世界でかなりの知名度を持っている。この3人の若手医師たちが中心となり編集したのが本書であり、基本的に「何をしようとしているか」を軸に構成されている。具体的には「リンパ節腫脹」「しびれ」といった臨床的な切り口に対して鑑別診断を挙げてから、「探しに行くべき身体所見」を教えている。

一部を紹介すると……

・「しびれの診察には、筋力と感覚の評価が必要である」(p.35)。しびれの章には冗談抜きで本当に「しびれ」た。同時に専門医と総合診療医の協力関係の重要性を考えさせられた。

・錐体路障害の所見例。Babinskiの自動回内徴候、第5指徴候、指折数え試験、下肢の外旋位(pp.41~43)。

・「左右差のない意識障害患者をみたら、まずはくも膜下出血を考えると意識しておくべき」(p.56)。

・下血と血便。「黒い固形便であれば、結腸から直腸内に停留していた時間が比較的長期であると思われるた

め、上下部両方を考慮しなければならない。便の中に赤い血液が練り込まれていれば、固形便が形作られる前の部位で出血しており、肛門側から距離があることが想定される」(p.139)。

・「回盲部は病気の宝庫！」回盲部周囲の炎症を起こす疾患は、虫垂炎のほか、回盲部憩室炎、Meckel憩室炎、回盲部炎(細菌性腸炎)、腹膜垂炎、骨盤内炎症性疾患、異所性妊娠、卵巣出血(p.156)。

・関節の診察法における関節の熱感。「基本的には関節は血流が乏しい組織で、周囲の筋組織に比べて冷たいのが原則である」(p.200)。

・「必ず見える眼底診察」(p.220)。いろいろな流儀があると思うが、筆者も最初はこの方法が良いと思う。

筆者自身は臨床教育の場で必ずしも多くの時間を身体診察に割くタイプではない。感染症コンサルタントという subspecialty と関係するが、艦隊の示威行動よろしく多数の初学者を引き連れ、漫然とベッドサイドで過ごす時間に大きな教育効果や診療上の意義を感じないためである(何より病棟スタッフや患者に負担を強いる)。代わりに筆者は2~3名の研修医・学生と「この所見の有無だけ調べに行こう」と「目的」を明確にしてからベッドサイドに向かう。

ちなみに「目的」が明確なだけでは人間模様渦巻くベッドサイドで血の通った身体診察の教育はできない。温かい人間関係を患者や研修医らと築き上げながら、ここまで歩んできた著者らの臨床医マインドが本書の根底に流れていることもぜひ感じ取っていただきたい。多くの読者を得ることを望みます。